1

次の各問いに答えなさい。

1 (1)～(4)の傍線部分の漢字にはよみがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。

(1) 新しい環境に慣れる。

(2) 科学の進歩に貢献する。

(3) 大きな荷物をアズける。

(4) 文化祭でエンゲキを鑑賞する。

2 (1)、(2)の傍線部分のかたかなに当たる漢字と同じものを、それぞれア～オから一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1) 記念写真を撮エイする。

ア 鋭敏　イ 朗詠　ウ 影響　エ 繁栄　オ 映画

(2) 専門家に調査をイ頼する。

ア 偉大　イ 作為　ウ 維持　エ 権威　オ 依存

2 次は、日直の花子さんと担任の田中先生が、職員室で帰りの会の打ち合わせをしたときの会話の一部である。よく読んで、あとの問いに答えなさい。

花子さん　失礼します。田中先生は［　①　］。
田中先生　はい、私②はここにいますよ。どうしたの、花子さん。
花子さん　先生、今日の帰りの会で連絡することはありませんか。
田中先生　花子さんは日直でしたね。ご苦労さま。では、修学旅行の班長会が行われることをみんなに話してください。
花子さん　わかりました。内容はどんなことですか。
田中先生　ここにメモがありますから、これをもとに、班長さんたちに確実③に伝わるよう連絡してくださいね。

班長会のこと
- 今週金曜日
- 午後1時30分
- 体育館

花子さん　はい。ほかに何か連絡することはありませんか。
田中先生　そうねえ。あっ、そうそう、班長会には筆記用具を持って行くことと、それに、時間に遅れないように行くことを付け加えてください。
花子さん　わかりました。それでは、これで失礼④します。
田中先生　お願いしますね。

1 ［　①　］の部分に入れるのに適当な「花子さん」のことばを、前後のつながりから考えて、十字以内で書きなさい。

2 傍線②の部分「私」の部首「禾」を何というか。ひらがなで書きなさい。

3 傍線③の部分「に」と、ことばのきまりや意味のうえで同じ用法のものを次の**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　雪のように白い。
イ　鳥がまさに飛び立とうとしている。
ウ　雨になったので傘をさす。
エ　うれしそうに話をする。
オ　桜の花がみごとに咲いている。

4 傍線④の部分「失礼」と同じ組み立てになっている漢語として、最も適当なものを次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。
ア　離陸　**イ**　開始　**ウ**　公私　**エ**　頭痛　**オ**　暗示

5 二人の会話とメモをもとにして、「花子さん」になったつもりで、帰りの会で話すための原稿を書きなさい。ただし、次の〈注意〉にしたがうこと。

〈注意〉
1　帰りの会で話すという状況に合わせて、敬体（です・ます調）で文章を書くこと。
2　「題名」や「氏名」は書かないで、本文だけを解答欄の原稿用紙に書くこと。
3　縦書きで、四行以内にまとめ、文字はていねいに書くこと。

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

自然と人間の共生、私たちは近年になってしばしばこの言葉を口にするようになった。だが、自然と人間の共生とは何だろうか。この問題を考えるとき、生存の条件を変えながら生きていく人間と、その条件を受け入れながら少しずつ過去の状態に戻っていこうとする自然との、根本的な生存原理の違いを私は感じてしまう。そして、この自然と人間の違いの奥には、自然がつくりだしている時間世界と、人間の時間世界の相違があるように思うのである。

自然は特有の時間世界を持っている。ゆっくりと流れゆく時間や時間スケールの大きさもその特徴といえるだろう。少しずつしか変わることのない森の時間はゆったりと流れ、ときにその森の中には、数千年を生きる古木が息づいている。それと比べれば、人間の時間世界は慌ただしくその短い時間を変わっていく。

だが、①それだけが自然の時間の特徴だとは思わない。なぜなら、②自然は円を描くように繰り返される時間世界の中で生きているのに対して、現代の人間たちは、直線的に伸びていく時間世界の中で暮らしているような気がするからである。

森の中では季節は毎年繰り返されている。草花の花が咲き森の木々が芽吹く春、濃緑の葉につつまれる夏、紅葉の秋、そして、落葉の冬。季節は毎年同じように循環してきて、その季節の中で森は、春の営み、夏の営み、そして、秋の営み、冬の営みを繰り返す。毎年変わらない春を迎えることは、森の正常な姿である。こんな森のようすを見ていると、私には、自然は循環する時間世界の中で生きているように思えてくる。一年を単位とする時間循環があり、さらに幼木が老木となって倒れていく、大きな時間循環の世界がある。

そして、この循環する時間世界の中で暮らすものたちは、変化を求めてはいないのである。太古の自然と同じように、今日の自然も生きようとしている。

だが、現代の人間たちはそんな時間世界の中では生きていない。③私たちは決して循環することもなく、変わりつづける直線的な時間の中で生きているのである。過去は過ぎ去り、時間とともに私たちはすべてのものを変化させてしまう。自然が去年と同じ春の営みをはじめるのに対して、人間たちは昨年から一年を経た新しい春を迎えるのである。

ある意味では、人間はこの直線的な時間世界を確立することによって、循環する時間世界の中で生存している自然から自立した動物になった。自然のように、精一杯春を生き、秋を生きていくことを、生命の証（あかし）とすることはできなくなった。

こうして、人間の営みは自然の営みを阻害するようになったのではなかろうか。④［　　］、人間たちは生存していくために変化を求めつづけるけれども、自然は生存条件の変化を求めてはいないからである。

とすると、自然と人間が共生するには、循環的な時間世界の中で、変化を望まずに生きている自然の時空をこわさないでおくことのできる社会を、私たちがつくりだすしかないのである。

（内山節（うちやま たかし）著「森にかよう道」による。）

（注）共生＝ともに生きていくこと。
阻害＝じゃますること。
時空＝時間と空間。

1 傍線①の部分「それ」は何を指しているか。文章中から二十二文字で抜き出しなさい。

2 傍線②の部分に「自然は円を描くように繰り返される時間世界の中で生きている」とあるが、「円を描くように繰り返される時間世界の中で生きている」ものたちのようすを表したものを、次のア～カから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 自然の中で生きているものたちが、毎年春になると一年前とはまったく違う姿を見せているようす。

イ 自然の中で生きているものたちが、どのような状況の中でも長い年月をかけて適応しているようす。

ウ 自然の中で生きているものたちが、太古と同様の成長過程をたどりながら土にかえっているようす。

エ 自然の中で生きているものたちが、一年を周期として前の年と変わらない季節を迎えているようす。

オ 自然の中で生きているものたちが、自分たちが生存するために環境を変えつつ暮らしているようす。

カ 自然の中で生きているものたちが、ゆっくりと長い時間をかけながら少しずつ進化しているようす。

3 傍線③の部分に「私たちは決して循環することもなく、変わりつづける直線的な時間の中で生きている」とあるが、「変わりつづける直線的な時間の中で生きている」私たち人間は、自然にとってどんな存在になったと筆者は考えているか。十五字以上、二十五字以内で書きなさい。

4 ④ の部分に入れるのに最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア したがって　イ だが　ウ なぜなら

エ そして　オ むしろ

5 この文章で筆者が言いたいことはどんなことか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 自然と人間が共生するためには、生存の条件を変えながら生きていく自然のあり方を正していくことも必要であるが、人間自身も自然保護運動に取り組まなければならない。

イ 人間は、変化を求める自らの生存のあり方と違って自然は変化を求めていないということを理解したうえで、自然と人間が共生できる社会を構築していかなければならない。

ウ 自然と人間が共生していくためにも、私たち人間は直線的な時間世界に生きることをやめて、自然環境に配慮した循環型社会を積極的につくりあげていかなければならない。

エ 循環的な時間世界の中で生きている自然の生存のあり方こそが本来のあり方なのだから、自然と人間が共生していくためには、人間も自然のあり方に戻らなければならない。

オ 自然と人間の共生のことはよく話題になるが、循環する時間世界の中で生存する自然と、直線的な時間世界の中で生存する人間は共生できないことを悟らなければならない。

4

次の文章は、「夏休みのある日、小学生の明は、友達の直行と釣りに行くことになったので、道具の準備をした。ところが、ずっとほったらかしにしていた竹の竿は、四本つなぎの一番下のところが割れていた。」という話につづく部分である。よく読んで、あとの問いに答えなさい。

いいチャンスだと思った。直行が持っているような、カーボンロッドの新しい竿がほしかった。家の手伝いは十分にしているから、釣り竿くらいは買ってもらったって、ばちはあたらない。朝仕事に草を刈ってきた父さんを待って、明はきりだした。

「父さん、釣り竿買ってほしい。」

父さんは草をしばってきた縄をそろえて、柱の釘にひっかけた。

「どうした、今まで使っていたのは。」

「あれ、ぶっ壊れて全然使い物になんねえ。」

「どれ持ってきてみろ。」

父さんは竿を受け取って、割れているあたりを注意深く曲げてみた。

「まだ使える。」

「エー、ぐにゃぐにゃ曲がってしまうよ。」

「お前、なおしてみるっていうこと考えたのか。これだったら、まだ使えるかもしんねえ。」

「だめだよこんなの。直行だってすごいの持ってんだから。」

「人の物は人の物だべ。」

「いいべ、おれなんか手伝いもしているし、竿ぐらい買ってくれたって。こんなの使えねえよ。」

明はポイと竿をほうりなげた。竿が乾いた音をたてて、ころころと転がった。父さんの顔がちょっと赤くなった。転がった竿のところまでゆっくり歩いて行って、拾いあげ、もう一度割れたあたりをさわってみながら父さんが言った。

「①どんなにいい竿があって、金があって、買えても、今のお前じゃだめだ。」

チェッと舌打ちして、明は小屋を出た。

「こき使うだけこき使って、ケチなだけじゃないか。」

腹が立って、明は思いきり小石を蹴った。朝飯を食べている時も、父さんの顔は見ないようにして、②わざとまずそうにごはんを食べた。

九時ごろ直行が自転車で迎えに来た。

「用意できた？」

「だめ、竿がないんだ。」

のろのろと玄関に出て言うと、直行が、

「それは？」

と言って指さした。壊れている竿が、玄関のわきに立てかけられていた。割れたところに十センチほど針金がきれいに巻かれている。明はサンダルをつっかけて、竿を握ってみた。振ってみたが曲がらない。

「早く行くべ。」

三十分ぐらい自転車で走ると、最上川の支流がある。そこは大きな淵でヤマメがいる。

竿を出して一時間もたつのに、どちらのウキも、ピクとも動かなかった。二、三度場所をかえてためしたが、相変わらず引かない。そのうち直行が明の竿の針金を見て、ひやかしてきた。

「なんだいそれ。」

「包帯。」

③明は自分を皮肉るように、作り笑いをした。

「そんな竿じゃ、釣れねえよ。」

と、直行が言った時だった。明のウキが、スッと水中にもっていかれて見えなくなった。ぐいっとあげると、確かな手ごたえがあった。

「きた！」

明は糸を切られないように加減しながら、足場のいい下流に位置をかえた。胸が高鳴った。糸を緩めないようにして、ゆっくり岸に寄せる。時々ヤマメは力がよみがえったように暴れ、明をハラハラさせた。直行がバシャバシャ水に入って、

「こっちこっち。」

と言った。誘導して寄せていった。直行が糸をたどってヤマメをつかんだ。

「やったあ！」

陸にあげると、二人とも同時に歓声をあげた。大物だった。

「やるなあ。」

と、うらやましそうに直行が言った。

「腕だね。」

「よく言うよ、針金のおまじないがよかったのかもしれないなあ。」

エサを付けかえ、竿を出してから、④そうかもしれないと思って、明はきっちり巻かれた針金を指の腹でなでてみた。

（最上一平（もがみいっぺい）著「キャベツ畑で夢をみた」による。）

（注）カーボンロッド＝炭素繊維を主材料とした釣り竿。
最上川＝山形県を流れる川。　ヤマメ＝谷川にすむサケ科の魚。

1 傍線①の部分「どんなにいい竿があって、金があって、買えても、今のお前じゃだめだ」と言った父さんは、明に、どんなことに気がついてほしくてこう言ったのか。「**工夫**」という語を必ず用いて、二十五字以上、三十五字以内で書きなさい。

2 傍線②の部分に「わざとまずそうにごはんを食べた」とあるが、明がごはんを食べるときに「わざと」まずそうに食べたのはなぜか。二十字以上、三十字以内で書きなさい。

3 傍線③の部分に「明は自分を皮肉るように、作り笑いをした」とあるが、この時の明の気持ちを表したものとして、最も適当なものを次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。

ア もどかしい　**イ** ほこらしい　**ウ** ねたましい
エ つまらない　**オ** なさけない

4 傍線④の部分に「そうかもしれないと思って、明はきっちり巻かれた針金を指の腹でなでてみた」とあるが、この時の明の気持ちを説明したものとして、最も適当なものを次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。

ア 古い竿でも愛情を持って使ったのでこのような大物が釣れたのだと考え、道具を手入れすることの大切さを感じている。
イ 父さんの思いがこめられたこの針金のおかげで釣れたのかもしれないと考え、父さんの今朝の言動を思い起こしている。
ウ カーボンロッドより竹の竿のほうがうまく釣れるのかもしれないと考え、買い換えなかったことに対して満足している。
エ おまじないとしておもしろ半分に巻いた針金が本当に効果があったのかもしれないと考え、とても不思議に思っている。
オ やっぱり父さんの言うことをきちんと聞いていたので釣れたのだと考え、助言してくれた父さんに対して感謝している。

5 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

藤次郎（とうじらう）といふ者、外に出（い）でしとき、犬の子の、はなはだ愛らしきを見て、もらひて帰り、家に飼ふ。この犬、その親犬の居所に、夜ごとに行きてそのかたはらに伏す。魚肉など得たるときは、口にふくみて持ち行き、親犬に与ふ。その道のほど、およそ三町あまりなり。藤次郎、大いに驚き感じけるが、たはぶれに犬を叱（しか）りて、人の家に犬を飼ふことは夜を守らしめんためなり。しかるに汝（なんぢ）、わが家に養はれながら、夜ごとに外にありて、おのれが職をつとめざるこそ不忠なれと言ひけるに、その夜より、隔夜に、主人の家と親の飼はれし家に伏しけり。

（中村新斎（なかむらしんさい）著「思斉漫録（しせいまんろく）」による。）

（注）町＝距離の単位。一町は約一〇九メートル。
汝＝おまえ。

1　傍線①の部分「かたはら」を現代かなづかいになおして、ひらがなで書きなさい。

2　傍線②の部分「しかるに」の意味として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　そうであるのに
イ　それにつけても
ウ　そうはいっても
エ　それだからこそ
オ　そうだとしても

3　傍線③の部分に「おのれが職」とあるが、「職」の内容を十字以内で書きなさい。

4　傍線④の部分に「言ひける」とあるが、「藤次郎」が言ったことは文章中のどの部分か。その部分の始まりの三文字を抜き出しなさい。

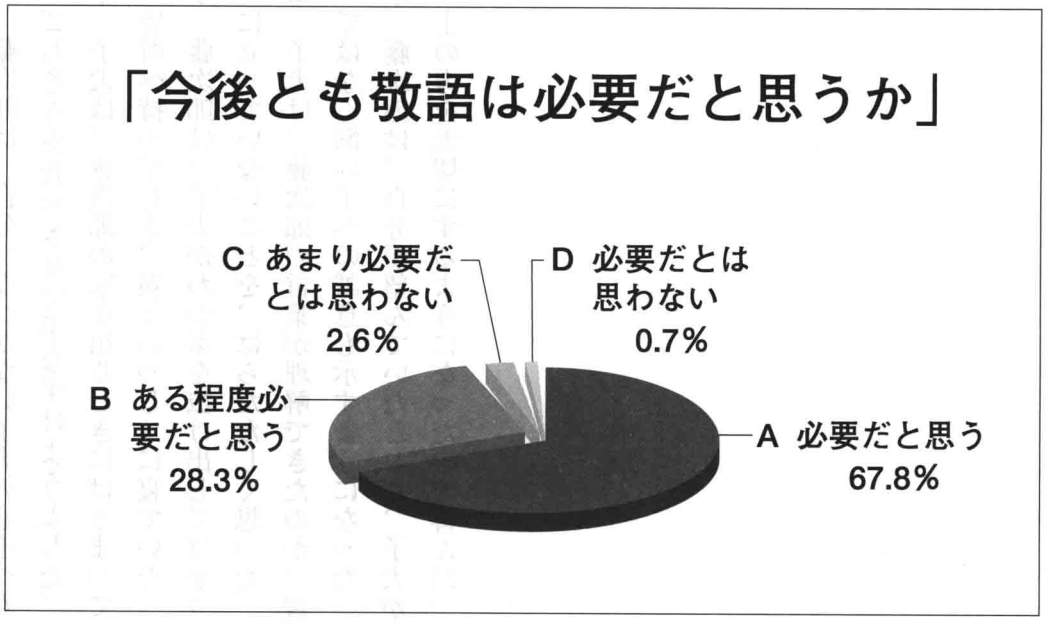
5　この文章の内容に合っているものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　藤次郎は、自分になつかない子犬の心をつかみたいと思い、ごちそうを食べさせて手なずけようとした。
イ　子犬は、藤次郎の家を出るときにはきまって食べ物を親の居所へ持って行き、親といっしょに寝ていた。
ウ　藤次郎は、子犬がわが家を抜け出してばかりいて少しも役に立っていないことを、はらだたしく思った。
エ　子犬は、藤次郎の言葉が理解できたのか、親を思う心だけではなく飼い主への誠意も示すようになった。
オ　藤次郎は、自分が望んでいたとおり、子犬が親よりも飼い主の方を大切にするようになったので喜んだ。

6

下のグラフは、文化庁が実施した「国語に関する世論調査」で、「今後とも敬語は必要だと思うか」と尋ねたときの結果を表したものである。このグラフを見て気づいたことをもとに、あなたの「敬語」に対する考えを、次の〈注意〉にしたがって書きなさい。

〈注意〉
1　体験や見聞をまじえて書くこと。
2　「題名」や「氏名」は書かないで、本文だけを解答欄の原稿用紙に書くこと。
3　縦書きで、六行以上、七行以内にまとめ、文字はていねいに書くこと。



（平成15年度「国語に関する世論調査」による。）
（注）「わからない」と答えた人がいたため合計は100%になっていない。